

写真のなかの一九三〇年代アフガニスタン

加藤 博

私の机のそばには、いつでも手にすることができるように、一つの本が置かれている。『エルサレムを撮影する——一九世紀の写真での都市のイメージ』と題された写真集 (Issam Nassar, *Photographing Jerusalem: The Image of the City in Nineteenth Century Photography*, Boulder: East European Monographs, 1997) である。そこには、穏やかな時間の流れが映し出されている。

この写真集を手にするときは、私が疲れているときであり、感傷的になり、自分の研究のスタンスを確かめたいときである。

現代の時間の流れは速い。中東や中央アジアでは、とりわけそうである。そのなかで、現状分析や政策決定での前提・出発点 (ステイタス・コウ) はすぐに変わってしまう。いや、変わらされてしまう。政策の現実性や歴史認識の齟齬という名のもとに。そして、こうした言葉やスローガンの応酬のなかで、問題の本質はぼやけていく。パレスチナ問題はその典型である。われわれがパレスチナ問題で感じる大きな苛立ちの一つは、いつの時代を出発点にして現状を検討するかの合意がないことである。ユダヤ人の入植? イスラエル建国? 第三次中東戦争? 安保理決議〇号? ……

ところで、私には、疲れたとき手にする、もう一つの写真群が加わった。一九三五年から約三年間、アフガニスタンで農業技術の支援にあたった農務官僚・尾崎三雄が残した写真である。そのすべては、現在、アジア経済研究所の図書館に保管されて

いる。その一部は、尾崎三雄 (文・写真) 『日本人が見た三〇年代のアフガン』 (石風社、二〇〇三年) に収められている。そのほか、二度の資料・写真展示会 (二〇〇六年七月東京、アジア図書館主催。同年一月山口県防府、日本中東学会・アジア図書館共催) が持たれた。

尾崎三雄は写真のプロの腕前を持っていた。見ていて、心が休まる写真が多い。そこには、昔の良質なモノクロの写真がそうであるように、静謐さがあふれている。それは、ときに悲しくさえある。写真の裏に、混迷する現在のアフガニスタンが透けて見えるからである。この点、一九三〇年代は、現代を裏から映し出す合わせ鏡として絶妙な時代である。一九二〇、三〇年代の大戦間期は、アフガニスタンを含む中東において、「国民国家」の枠組みが確定し、現代におけるほとんどすべての思潮が出揃った時代だからである。

写真の時代には、決して戻れない。しかし、一九三〇年代は、アフガニスタンの現状を分析し、将来を見通すための出発点としては有効である。ぜひ、現代のアフガニスタン国民に、尾崎三雄が残した写真を見てもらいたいものである。

なお、尾崎三雄の生涯とかれが残した資料・写真の詳しい情報については、現在準備中のウェブサイト (<http://wakamecon.tit-u.ac.jp/~arcasid/>) を参照していただきたい。

(かとう) ひろし / 一橋大学大学院経済学研究科教授